

教育 (1)

子どもの居場所の解釈に関する一試論——子ども・若者の「居場所」に関わるスタッフ へのインタビュー調査から

加藤敦也（武蔵大学社会学部ほか非常勤講師）

1. 目的

本報告の目的は、不登校児童生徒やひきこもり経験のある若者が通う「子ども・若者の居場所」の社会的な位置づけを、「居場所」のスタッフによる子ども・若者との関わり合いに関する語りから考察することにある。ここで「居場所」という言葉は、もっぱら 1990 年代から 2000 年代にかけて不登校児童生徒数の急増を背景に登場した「学校外の居場所」（御旅屋 2012）を指し示す。

「学校外の居場所」としてのフリースクールに関する先行研究（佐川 2009）では、居場所に通う子どもへの支援の文化的構造が明らかにされ、居場所に通う子どもたちへの居場所スタッフの「受容と共感」という態度、あるいは子どもの不登校経験に言及しない「パッシング・ケア」という態度性向が確認されている。

本報告では、上述の先行研究を踏まえ、居場所スタッフのライフストーリーに着目し、スタッフそれぞれの人生経験が居場所での子どもとの関わり方に反映される位相を明らかにする。より具体的には、スタッフの過去の不登校経験によってつちかわれた非学校的規範がスタッフの子どもの理解に反映されるあり方について考察する。

2. 方法

関東地方にあるフリースペースの 1 つを対象とし、そこにスタッフとして関わるもの 5 名へのインタビュー調査を行った。調査期間は 2016 年 2 月 22 日から 3 月 17 日である。インタビューの時間は、70 分から 120 分の範囲である。なお、5 名の調査協力者のうち、2 名は 30 代であり、残り 3 名は 50 代以上である。30 代の 2 名は不登校ないし高校中退の経験があり、50 代以上のうち 2 名は子どもが不登校だった経験を持つ。

3. 結果

調査協力者 5 名の語りから明らかになったことは次の 2 点である。

①不登校経験のあるスタッフは、自身の学校での経験や家庭での経験から、子どもに対して共感的な理解の手がかりを見出そうとしている。ただし、子どもとのコミュニケーションで何らかの齟齬が生じている場合には、共感的な理解という文脈ではなく、精神医学や心理学の知識を援用して、「他者」として理解しようとする語りも得られた。

②教員経験のあるスタッフは、その経験史において子どもの不登校問題を「学校に通う子ども」との比較参照において解釈する。ただし、現状の学校教育および教員を取り巻く環境には制約が多いと解釈しており、オルタナティブな場所として居場所をとらえている。

4. 結論

居場所を構成する現実をスタッフの語りという側面から照射すると、「受容と共感」といったケアリング・コミュニティとしての特徴だけではなく、コミュニケーションの齟齬を、心理学、教育学、育児学、ライブパフォーマンス等を行っている別の場での経験、教員としての経験等、もろもろの不登校に関する複数の交差する言説から解釈するという特徴も浮かび上がった。それはまた、オルタナティブ教育の定型化されたストーリーとの不連続を表象してもいるといえる。

参考文献

御旅屋達, 2012, 「子ども・若者をめぐる社会問題としての『居場所のなさ』——新聞記事における『居場所』言説の分析から」, 年報社会学論集第 25 号, 13-24.

佐川佳之, 2009, 「不登校支援における『秘密』の機能——不登校児の『居場所』、フリースクールを事例に」, 年報社会学論集第 22 号, 47-64.